

| | |
|---------|------------------|
| 氏名（本籍） | 呉 勤文 |
| 学位の種類 | 博士（国際日本研究） |
| 学位記番号 | 博 甲 第 9755 号 |
| 学位授与年月日 | 令和 3 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 |
| 学位論文題目 | 夏目漱石とイギリスロマン主義思潮 |

| | | | | |
|---|---|--------------|---------|---------|
| 主 | 査 | 筑波大学 准教授 | 博士（学術） | 平石 典子 |
| 副 | 査 | 筑波大学 教授 | 博士（学術） | 石塚 修 |
| 副 | 査 | 筑波大学 教授 | 博士（宗教学） | 津城 寛文 |
| 副 | 査 | 筑波大学 教授 | 博士（文学） | 山口 恵里子 |
| 副 | 査 | 日本比較文学会北海道支部 | | 飛ヶ谷 美穂子 |

論文の要旨

本論文は、夏目漱石（1867-1916）におけるイギリスロマン主義思潮の学問的背景と創作の関連性を探究するものである。比較文学研究の手法で漱石の蔵書、文学論ノート、『文学論』、創作メモなどの資料と作品を精読するとともに、同時代文献を参照することによって、先行研究の間隙を埋め、漱石の作品におけるイギリスロマン主義思潮の受容の様相と近代日本における意義を考察することを目的としている。

論文の構成は以下の通りである。

序 章

第一章 ワーズワースの‘nature’の翻訳—「英國詩人の天地山川に対する観念」の位置付け

第二章 イギリスロマン派の抒情性と心身一元論の背景—『草枕』の自然観の表象

第三章 フランス革命とロマン主義への関心の交差

第四章 『妖精の女王』とスペンサー連の投影—『夢十夜』の女性像

第五章 ジョン・キーツの審美主義との関わり—『文学論』と『三四郎』—

第六章 ナチュラリズムの探究—『それから』と René の比較

第七章 ロマンティック・ナショナリズムの生成—『彼岸過迄』の「浪漫趣味」

第八章 『四季』の自然観—『こゝろ』に流れ込んだ「感情」の文脈

終 章

序章で論文の背景、問題意識と研究方法を述べ、先行研究をまとめた後、第一章では、明治初期のワーズワースの翻訳を中心に、漱石の論文「英國詩人の天地山川に対する観念」（1893年）の位置付けが考察されている。漱石によるイギリスナチュラリズムの紹介が、当時の日本の翻訳ストラテジーに変化をもたらし、その後のワーズワースの「自然」の翻訳に東西の自然観の融合が示されていることが明らかにされる。

第二章では、漱石の自然観における心身一元論が考察されている。『文学論』を手がかりにその背景がまず考察され、『草枕』におけるシェリーの引用やワーズワースの「水仙」への言及の分析から、漱石が漢詩と禅の自然観をも考慮しながら、自然と心の合一性を探求したことが見出されている。また、心身一元論を取り入

れたリボーの『感情の心理学』における“sympathy”の概念と、シェリー「ひばりに寄せて」の表現の分析から、自然との合一性を求める旅の探求が他者に対する倫理感情の生成に繋がるとの指摘も行われている。

第三章は、漱石におけるフランス革命とロマン派への関心の交差について考察したものである。漱石がダウデンの『文学研究』を手がかりに、フランス革命に呼応したイギリスロマン派の革命精神とホイットマンの楽天的な「平等」観を対比し、「四民平等」の理想への関心を喚起したことが指摘される。また、マレットの『フランス革命』が漱石にルソーの自然権に関する知識を与えた一方で、東西文明の違いに気付かせたとし、漱石がフランス革命の理想を初期作品に描き込んでいることを明らかにしている。

第四章は、スペンサーの『妖精の女王』における「暗闇の奇想」という特徴から、『夢十夜』との比較の可能性を見出したものである。『妖精の女王』のユーナ像が『夢十夜』の「第一夜」の女性像に投影していること、「スペンサー連」を用いたラファエル前派の詩人の描写も「第一夜」に投影していることを明らかにし、『妖精の女王』に描かれる「美女」と「悪女」の描写と二面性を考察することによって、『夢十夜』の「第五夜」、「第七夜」、「第十夜」における女性像の投影を指摘している。

第五章では、キーツに着目し、『文学論』と『三四郎』との関わりが考察されている。まずキーツの「ギリシャ古壺のオード」、『レイミア』を引用した『文学論』に用いられている「感覚」、「感情」、「自然」、「文芸上の真」という論述がキーツの審美主義と関連することが指摘され、それをふまえた『三四郎』の中の「空中飛行器」論争が、『レイミア』に見られる科学思潮とキーツの想像力の衝突を基底とするのではないかとされる。さらには、キーツとスコットの女性像が同時に美禰子に投影していること、広田先生の言葉におけるイギリスナチュラリズムの背景が指摘され、キーツの詩の翻訳者である田山花袋に対する漱石の人物造形の答えが『三四郎』に描き込まれていることも示されている。

第六章では、漱石が『文学論』で言及したシャトーブリアンの『ルネ』と『それから』の主人公像の相似点が論じられている。また、ノルダウの『墮落論』の影響と『それから』の表現の関連性についても検討され、代助像に見られるデカダンスの要素が見出されるとともに、『ルネ』における『オシアン』の受容を取り上げながら、工業化と都市化を批判し、人間と自然環境との調和的な家族像を求める代助の眼差しが、ロマン主義の自然賛美の流れを汲んでいるという側面が指摘されている。

第七章では、漢語の「浪漫」に見られる意味の変化が考察されている。ドイツロマン主義を摂取した明治文壇のロマンティック・ナショナリズムの影響で、「浪漫」という語が国家主義の道德観と結び付けられるようになったことが指摘され、「文芸と道德」で「浪漫主義」の道德観を批判した漱石が『彼岸過迄』で使用した「浪漫趣味」がロマンティック・ナショナリズムの表象であることが明らかにされている。また、漱石が「私の個人主義」と「点頭録」に至るまで、国家と個人の間をめぐって思索し続けていた痕跡が辿られている。

第八章は、漱石及び明治文壇の論者たちがランドスケープ描写の先駆者であるトムソンの自然描写をナチュラリズムの一環として捉えていたことが論じられている。キリスト教の自然観に基づく四季の循環の構造が描かれているトムソンの『四季』が『こゝろ』に与えた影響について指摘され、『四季』の「春」に示されている原罪観念が『こゝろ』の表現に流れ込んだ可能性も示されている。この考察を通して、イギリスロマン主義におけるナチュラリズムの影響が漱石の作品を理解するための重要な手がかりである、ということを示した。

以上の考察から、終章で本研究の成果をまとめるとともに、今後の課題について述べられ、イギリスロマン主義思潮が夏目漱石の著作にさまざまな形で影響を与えたことを本論文が明らかにすることで、近代の「自然」という概念への理解と、漱石作品の読解などに寄与するものであるとしている。

審査の要旨

1 批評

本論文は、夏目漱石とイギリスロマン主義思潮の関連を、先行研究ではこれまで取り上げられてこなかった作家や作品をも取り上げて探求することで包括的に考察しようとした、意欲的な研究である。筆者は日本語、英語、フランス語で書かれた膨大な資料を読み解き、夏目漱石の著作においてワーズワース、シェリー、キーツといったイギリスロマン主義の詩人や、彼らにも影響を与えた16世紀の詩人エドモンド・スペンサー、ロマン主義の先駆ともされるジェームズ・トムソン、さらにはフランスの初期ロマン派作家であるシャトーブリアンの作品がどのように参照されているかを明らかにする。さらには、フランス革命の漱石の理解についても、当初はロマン主義者たちがその理念に共鳴していたこととの関連性についても指摘する。筆者の地道な資料の渉猟と、夏目漱石の著作と資料を照らし合わせた分析・考察は、『草枕』(1906年)『夢十夜』(1908年)『三四郎』(1908年)『それから』(1909年)『彼岸過迄』(1912年)『こゝろ』(1914年)といった漱石作品の新しい読みの可能性を示すとともに、これまで比較文学研究などの分野において論じられてきた漱石作品の源泉研究や、近年盛んになってきた、アジアにおけるイギリスロマン主義の再評価をめぐる議論に新たな知見を与えるものである。また、本論文は明治における「自然」や「浪漫」という概念の分析から、伝統的な価値観と西洋の思想・文化が混在する日本の「近代」の問題も考察しており、こうした観点からも、関連する研究分野の進展に寄与するものであるといえる。

一方で、個々の作品の比較については説得力のある議論が展開されているものの、分析対象である作家や作品ですべてを説明しようとする傾向が時折見られ、説得力を削いでいることや、「自然」という概念の議論において、全体の変化を見通そうとする視野の広さが足りないことなど、まだ不十分な点があることも否めない。また、先行研究の取扱いについても、その読み込みも含めて、より緻密な整理が待たれることも確かである。ただ、これらの問題点は、今後、筆者が研究を深化させる中で解消されてゆくものと十分に期待できる。

以上のように、本論文には改善されるべき課題もあるものの、その中で導き出された種々の新知見は、学界に対する大きな貢献であり、本研究の成果は、優れたものであると判断される。

2 最終試験

令和3年1月7日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(国際日本研究)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。